

2023. 3. 12. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書18章9～14節
『高ぶりとへりくだり』

「ファリサイ派の人と徴税人」のたとえという小標題が掲げられています。物語は単純です。一つの事柄に対して二つの結果が生まれたということです。ここに登場するファリサイ派の人の祈りは、ルカが敵愾心や侮蔑をもって誇張して描いたものではありません。いわば「選民意識」というナショナリズムが当時のユダヤ社会にはすでにはびこっていたことの証しでもあるのです。

紀元70年にラビ・ネフヤ・ベン・ハッカーヤーは「わが神、わが父祖の神よ。私はあなたが、私に律法の教えの家と集会所に座す人々に連なる者とさせて下さったこと、私を劇場とか演技場に連なる者となさらなかったことを感謝します。私は努力し、彼らも努力します。私は熱心で、彼らも熱心です。しかし、私は樂園を得るのに努力しますが、彼らは墓の泉のために努力します。」と誇らしげに書いています。

また、紀元80年のラビ・シメオンは「自分の正しさによって全世界が裁きから免れるくらいに自分の正しさが大きいと考えた」と記しています。

ユダヤ戦争敗北後のユダヤ教世界とは、このように「選民意識」が内面に特化していった時代でもあります。ファリサイ派は、単に律法を忠実に守るだけでは飽きたらず、それ以上の善行を積んでいることを誇りにしました。例えば、律法では年一回の断食が奨励されているだけなのに、彼らは週二回の断食を誇りました。即ち、全ユダヤ人のために日曜と木曜にも断食をしていたといえます。また、律法の十分の一税は収入のすべてについてではないのに、彼らは全収入の十分の一を献げました。ファリサイ派はなぜこのようなことをしたのでしょうか。それはへりくだる心をつくるためだったのです。しかし、結果として彼らは徴税人を含めて他の人々を軽蔑する側に走ってしまったということです。

地中海世界の只中にある初代教会で立ち働いたルカはファリサイ派などと会ったこともありません。異邦人教会に生きる彼が、わざわざこのようなことを伝えたのは、初代教会内部にもこれと似た事例が噴出していたことがうかがい

知れるのです。

礼拝とは神に祈ることだと言われます。しかし、わたしたちは限りある者ですから、永遠なる神を云々したり、祈ったりすることは簡単なことではないのです。それは、神の前でおののく、つまり自分の内側にある「悲惨」を認めしめられることを抜きにしては、赦されないことだからなのです。

13節の「神様、罪人のわたしを憐れんで下さい。」という徴税人の言葉は、そのままわたしたちの生き様を鋭く問い直します。「悲惨」を内側に見出すことなしに礼拝するなどあり得ないことなのです。礼拝とは、祈るとは、そして愛されて在るということを知るとは、上を仰いで神を拝むのではなく、内を見つめて自分の「悲惨」から思いをそらさないことなのでしょう。

14節の「義とされて家に帰ったのは、この人であって」と記されます。直訳すれば「神によって正しいと宣言された者、正しいと認められた者」という意味です。人の正しさは、その人の苦行や善行ではなく、良心の苦悩がそのまま礼拝であり、祈りなのだということです。「高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」のです。